

女性教育情報センターだより

2021.11.05 発行 国立女性教育会館情報ボランティア No. 93

荻野吟子のマンガ PR 冊子制作に協力 埼玉県立熊谷女子高校・漫画愛好会 インタビュー [前編]



近代日本で最初の公認女性医師となった荻野吟子(1851 嘉永4年～1913 大正2年)。その不屈の精神を若い世代に知ってもらうため、埼玉県男女共同参画課が企画した PR 冊子「荻野吟子～女医のパイオニアは埼玉出身!～」のマンガを制作したのは、吟子の出身地にある女子高校の漫画愛好会の皆さんだ。

NWEC ボランティアが同校を訪問し、制作を通じて感じたこと、女子高ライフ、さらにはジェンダー平等などについて、顧問の青木先生同席のもと、愛好会会員2年生3名*に話を伺った。今号ではその前半を掲載する。

*ペンネームと自身で描いたイラストでの紹介とする

Q. 制作に先立ち、どのように調査をしたのですか?

かにみそ: みんなで荻野吟子記念館^(注1)へ行ったり、既存の『荻野吟子抄』というマンガ^(注2)を参考にしたりしたほか、各自がインターネットで調べました。

Q. 吟子さんについてどう思いましたか?

かにみそ: 名前しか知りませんでしたが、自分の目標を決めたら、何としてでも頑張る強い意志を持った女性だということがわかりました。

Shiho: 名前も知らなかったのですが、調べていくうちに、当時の社会で女性を縛っていた固定観念を破って挑戦しようという彼女の心構えに感動しました。

碧: 今も、女性だから、ということが残って

ますが、当時はもっと厳しかったと思います。そのなかで、周りの反対にもめげず自分の意志を貫いたのはすごいなと思いました。

Q. 自分の進路や将来を考える上で影響を受けたことはありますか?

かにみそ: 教職に就きたいと思っているのですが、教師をしている親から「根性が足りないからやめたほうがいいのでは」と言われました。でも吟子さんのように自分のやりたいことを最後までやり遂げようと思いました。

Shiho: 私は薬剤師と漫画家の両方を目指しています。家族は、「両立は厳しいかもしれない」と言いますが、誰に何を言われても、吟子さんのように諦めないで頑張ろうと思いました。

碧: 将来についてまだ具体的に決まっていませ

ん。母に相談することが多いのですが、話しているうちに影響を受けて自分の立ち位置が揺らぎやすいので、吟子さんのようにひとつの事をやりきれるようになりたいと思っています。

Q. 次に、女子高ライフについて伺います。女子高に来てよかった、と思うことは？

かにみそ：もともと男子と話すのがあまり好きではありませんでした。女子だけだと、みな明るくて話しやすいです。他の中学出身の人たちと向き合えたのも良かったです。



Shiho：私は男子の目を気にしてしまっていてできなかったこともありまして。女子高に来てから、自分を出せることが多くなったのでよかったと思っています。



碧：共学だった中学までは、授業中、前に出て発表する時、注目されると気になってしまいました。今のほうが発表や話もしやすいです。

Q. 共学だったらよかったのに、と思うことはありますか？

かにみそ：(共学に通っている) 友達に彼氏がいて羨ましいなと思うこともあるのですが、女子高だから彼氏ができない、というのではなく、

その子に魅力があるからだろうな、と思っています。

Shiho：幼稚園から中学生までずっと一緒だった男友達がいいます。(進学で) 離れてしまい会えなくなり寂しいのですが、時々連絡を取り合っています。女子高に来て、よい関係が続いています。



かにみそ：普段あまり恋愛系の話は出てこないです。共学だったらもっと話題になるのかも。

碧：恋愛の話は話題としては楽しいですが…現実としてはあまり考えられないです。今はいいかな、と。

かにみそ：男子がいたほうがよいと思うのは、重い物を運んだりするときくらいで、他は特に思うことはないです。

Q. 他校、例えば(市内にある男子校の) 熊谷高校 [=熊高] との交流はあるのですか？

かにみそ：部活単位ではしているところもあります。

青木先生：昔はクラス単位で熊高との交流会をしていましたが、男子が変に緊張してしまって、全く会話にならないことが多かったです(笑)。コロナ前までは生徒会単位の交流もありました。例年、当校の文化祭には熊高生が大勢来てくれますし、コロナが収束すれば、交流も再開すると思います。

[MH, AF]

～後編 次号 94 号 2022 年 3 月発行予定 に続く～

(注1) 熊谷市立荻野吟子記念館 <http://oginoginkokinenkan.com/top.html>

(注2) 佐佐木武観原作；しいやみつのり作画『マンガ荻野吟子抄:日本公許女医第一号』妻沼町商工会むらおこし事業「荻野吟子マンガ作成実行委員会」1998 年

漫画愛好会・顧問 **青木牧子先生**：熊谷女子高校の卒業生。教師になった時から抱いていた「いつかは母校で教えたい！」との思いが実現。美術部顧問も兼務。

制作こぼればなし 依頼の背景には、埼玉県庁に異動した元同校教員の存在と、吟子の地元の女性に描いてもらいたいという企画者の考えがあった。マンガの人物は1名が担当し、背景・コマ割り・トーン(影)・セリフ入れなどを皆で分担し完成させた。表紙背景にピンクの薔薇をあしらったが、コロナ禍での医療・介護従事者への感謝を表す埼玉県のキャンペーンのシンボルが「ピンクの薔薇」であることは、描いた本人も私共も後で知った～青木先生



青木先生



校章

参考 熊谷女子高校 HP <https://kumajo-h.spec.ed.jp/home>

→学校生活→部活→漫画愛好会 をクリックするとより詳しい活動内容を知ることができる。

「荻野吟子～女医のパイオニアは埼玉出身！～」PDF 版の閲覧/ダウンロードは 埼玉県男女共同参画課 HP から <https://www.pref.saitama.lg.jp/a0309/danjyo-ginko/oginoginko.html>

～荻野吟子の生まれ故郷を訪ねて～ [熊谷市立荻野吟子記念館 - Google マップ](#)



荻野吟子記念館 [外観]
生家の長屋門を模した和風建築



同左 [展示室]
吟子の生涯に関する年表や資料を展示



荻野吟子生誕之地史跡公園



記念館裏から見る利根川と河川敷



葛和田の渡し(赤岩渡船*) 右岸乗り場



渡し船から見る利根川



妻沼グライダー滑空場



生家の長屋門
(利根川の対岸 群馬県千代田町「光恩寺」へ移築)



門の前には吟子像が立っている

楽しいプチ旅行でした



写真撮影は全てボランティア[AF]

*埼玉県熊谷市葛和田 と 群馬県千代田町赤岩 を結ぶ渡し船。県道扱いのため無料。自転車も乗船可能。



小川町の自然の中で育てる若き養鶏家

桑原 花さん

訪問
しました



情報センターだよりでは、これまでも様々な分野で活躍する女性を取材してきた。

今回は、比企郡小川町でバイオガス技術を活かした循環型有機農業を営む「ぶくぶく農園」で養鶏に取り組む、桑原花さんを訪ねた。事前に実施したオンライン取材の中で、養鶏についての詳細や花さんの考えを伺っていたので、現場見学をしながら疑問点などに答えていただいた。

明るい笑顔で迎えてくれた花さんは、早速鶏舎に案内してくれた。広い鶏舎が2棟並び、それぞれおよそ200羽あまりの若い雌鶏が、おがくずを敷いた土の上を歩きまわっている。

ちょうどおやつの時間ということで、新鮮な野菜（その時はみずみずしい蕪）と、近隣の有名豆腐店のおからに米ヌカを混ぜたものが与えられていた。餌の野菜は、農園で作られたが規格外で出荷できないものだそうだ。

続いて採卵の様子も見学。鶏は卵を産む場所が決まっており、備え付けの箱の中に産むので、そこから集めてくる。

その後、飼料タンク、自動鶏卵洗浄選別機、パック詰めなどの説明を伺った。



おやつ時間はおからと米ヌカ

なぜ養鶏を？進路の決定まで

父親が無農薬・無化学肥料栽培の農業を始めるため、花さんが5歳の時、東京都杉並区から小川町に一家で移住した。

突然の環境の変化ではあったが、自然豊かな生活は、かえって新鮮で楽しく感じていたという。熱帯雨林に興味を持ち、大学では森林学科で森林生態学を学んだ。卒業時にフィリピンでNGOのアシスタントとして1年半、農村開発プロジェクトに参加する機会を得た。そこでの仕事は、デスクワークであったが、現地の農業の実態を見ることで、進路や農業、そして家業を見つめ直すきっかけになったそうだ。

帰国後、親元に戻り、1年間の研修後、農園の養鶏部門を任されることになった。理由としては、家業を手伝う作業要員としてではなく、自立して経営するため、経営分離をしたいと考えていたことと、このタイミングで、地元の平飼養鶏家が廃業するため、資材やノウハウを譲ってもらえる話があり、よいチャンスと捉えたのだ。そこで、経営分離をし、事業拡大（それまでの150羽から500羽に増やす）をめざしたそうだ。

卵への思いやこだわり

～安全でおいしい卵を安価に届けたい～

卵の質は、鶏の飼育される環境と飼料によって決まる。少しでもストレスを軽減するため、平飼いでの飼育をしている。ゆくゆくは、理想としている放牧養鶏をめざしたいそうだ。飼料も安全性に注意を払って選択し、遺伝子組み換えでないトウモロコシや国産小麦粉・ふすま・大豆かす・魚粉・炭酸カルシウムを配合して与え、その他、農園で収穫した無農薬野菜、おからに米ヌカを混ぜたものなども食べさせながら、抗生剤やサブリに頼らないこだわりの飼育をしている。



花さんの卵

主にJA直売所と地元の一部販売所に出荷しているが、直接手に取って見てもらえることが、嬉しいそうだ。そんな努力と、地元の人たちにできるだけ値上げせず届けたいという思いが理解され、リピーターの増加とともに、販売量も増えてきている。

養鶏の実際



①ひよこを買い付け、産卵するようになるまで育てる。

②生後5ヶ月から1年半くらいまで、毎日採卵し、洗卵してからパッキングして出荷。

採卵中。鶏はこの箱の中に卵を産むそうだ。



③生後1年半たった鶏は、食鳥処理場で解体。「廃鶏」として処分するのではなく「親鶏」として加工し、最後まで全てをおいしく食べる。(ブロイラーと比べ、肉は固いが旨みが濃い)



買い付けられたひよこと卵

埼玉農業女子特集119回掲載

埼玉県農林部農業支援課では、日々生き生きと農業に取り組んでいる女性農業者を紹介している。

今後の展望

～現状をふまえた上で農業を考える

現在、養鶏業は大規模に経営をしているところが多く、飼料、廃鶏など、小規模養鶏家を取り巻く環境は困難になってきているようだ。廃業してしまうと、受け継ぐべきノウハウや販路も絶たれてしまう。そこで、平飼い養鶏の持続と、消費者へ安全安心な卵の安定供給をめざして、大規模養鶏とは一線を画す養鶏をめざしている。廃鶏の処分も業者頼みでなく、自分で行う方法を確立するべく各方面に働きかけ、現在は、鶏肉はソーセージやミンチにして、小川町の保育園に提供、鶏ガラはレトルトスープを開発する仲間と協力して、インターネットで販売中だ。

農業全般についても見通しを持つ。小川町では、親世代が農業を営む子どものほぼ100%は勤め人であり、専業農家は減りつつあるため、地元を大事にして、地元の食卓を支える総合農家としてやっていきたいと花さんは言う。また、少子高齢化が進む中、現在のような方法でなく、広い土地でやや粗放に育てる、土地利用型の農業に変えていくことも考えたいとのことだ。

訪問を終えて

日本の食糧自給率は非常に低く、今後の農業のあり方に不安があったが、若い農業家の花さんが地元の人たちの力になりたいと思いつながり、日々着実に行動し、しかもしっかりと将来を見据えながら、自分の考えをもって実践していく姿に、頼もさを感じた。

しかしながら、生後半年に満たない幼子を育てながらの仕事は、どちらも待たないで、かなり厳しいに違いない。体力的にも困難と感ずることも増えたようだ。まだまだ、食を担う農業に携わる人たちの努力に頼ってばかりでなく、様々な支援が必要だ。私たちも普段の生活を見直して、できるだけ応援していきたいと思う。

[CO]

情報
セン
ター
資
料
紹
介



(左) 子育て世代の農業経営者：農業で未来をつくる女性たち 和泉真理著 筑波書房 2020

(右) 農業女子：女性×農業の新しいフィールド 藤淳子著 洋泉社 2015



シリーズ

SDGs

SDGsで考える

「食」「地域づくり」①

小川町の「ぶくぶく農園」は、循環型農業を実践している家族経営の農園だ。数十年前は日本各地に、このような小規模農家が多くあり、地域の風土に根ざし、生態系を守り、地域住民のための食料生産を担ってきた。

しかし、行政や農協の後押しもあって、生産性の向上を目指し、効率化、画一化を図ろうと大規模化し、農薬や化学肥料に頼る農法が推進されてきた。遠く離れた市場へ、農産物を均質化された商品として安定供給することが求められる。こうした農業は、流通のコストやエネルギーがかかり、土壌を疲弊させ、生態系のバランスを崩し、農家の健康を害することもあり、働きがい

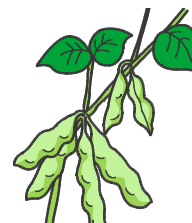
や幸福感には結び付きにくい。そして、農家がいくら頑張っても利益の大部分は、農業機械、化学肥料、農薬などの経費に消える。また、画一的な生産法は、気候変動に対応できないリスクがあり、大量の食料の輸出入によって、不公平な食料の配分という社会の課題も引き起こしている。

一方で、「地産地消」「地域おこし」などの旗を掲げて、農産物直売所が各地で営まれ賑わっているのは、もはや珍しくない。2009年度の調査で、全国で1万6816店舗あり、11万9000人の雇用を生み出している。この直売所の原点は農家の自給にあり、推進力になったのは農村女性による自給運動だという*。

新鮮でおいしく安心、だけではないメリットが地産地消にはある。輸送のエネルギーが節減され、仕事生まれ若い就農者が増えると地域に活力が沸く。身の丈に合った生産法で、農家は自然の中で働く喜びを実感できる。これらをSDGsに照らしてみると、農業の「食料を供給する」という役割は目標2の「飢餓をゼロに」に大きく貢献している。また農業は環境を維持するとともに、負荷を与えることもあるので、目標12「つくる責任つかう責任」、目標13「気候変動に具体的な対策を」、目標15「陸の豊かさを守ろう」などにも関係する。そして農業には雇用を支える役割もあるため、目標8「働きがいも経済成長も」や目標9「産業と技術革新の基盤をつくろう」にも関係する。産直は、これらの目標達成に貢献するものといえるのではないだろうか。

とはいえ、産直の流通量は全体のまだ数パーセントにすぎない。地産地消が普及し主流化していくには、志ある農家が増えるのはもちろんだが、消費者の側が、そのような地元農家を買って支えるエシカルな消費者に転換していくことが重要だ。そして、一部で行われているスーパーマーケットなどで、産直の有機野菜コーナーを設けるなどの動きが全国的に広がれば、消費者も手に取りやすくなる。

現在では、国も法整備を進め、行政・農協ともに有機農業の生産拡大を後押ししている。また今や有機農家も様々であり、小規模に産直する人もいれば、大規模生産・大規模流通に取り組む人もいる。有機農家が行政・農協と対立する時代から協力し合う時代に移りつつある今、SDGs推進のためにも身近なところからの意識変革が必要だ。



〔TK〕

*「農文協の主張」2011年10月号

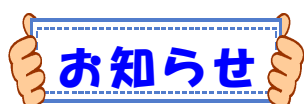
<https://www.ruralnet.or.jp/syutyo/2011/201110.htm>

参考資料

『持続可能な地域のつくり方：未来を育む「人と経済の生態系」のデザイン：実践地方創生×SDGs』

寛裕介著 英治出版 2019

『ごみを資源にまちづくり：肥料・エネルギー・雇用を生む』中村修著 一般社団法人農村漁村文化協会 2017



令和3年度「男女共同参画推進フォーラム」

オンライン開催

12月1日(水) 9:00 ~ 12月21日(火) 17:00

NWECボランティア 参加します！

* NWECへようこそ * ボランティア活動紹介 * みんなの掲示板

* ワークショップ「オンライン読書会：『兄の名は、ジェシカ』」 12月19日(日) 14:00 ~ 15:30

* パネル展示「道を切り拓いた埼玉の女性たち」

ぜひご参加ください。

編集後記

・コロナ後の世界、元に戻るのか、大変化のチャンスにできるのか。

(TK)

・ぶくぶく農園の玉子の黄身は宝石のようなレモンイエロー、絶品の美味しさでした。

(YK)

・若い世代がSDGsについて学び、考え、行動しようとしている。大人は？

(AF)

・現役女子高生のジェンダーへの考えを聞き、頼もしく感じた2021年夏でした。

(MH)

・もっともっと考え、行動していかなければと思うことしきり……

(CO)

・ニューノーマル、追いつけずもがく昭和びと

(YH)